

厚生労働省委託事業 地域の人材による子育て支援活動強化研修事業

地域子育て支援拠点研修事業〈石川開催〉

《開催概要》

- 開催日：平成 29 年 10 月 14 日（土）10：00～16：00
- 会場：石川県地場産業振興センター（石川県金沢市）
- 主催：NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援：（社福）全国社会福祉協議会・石川県・金沢市・白山市
（公財）いしかわ結婚・子育て支援財団
- 協力：認定 NPO 法人おやこの広場あさがお
- 参加人数：137 名

＜プログラム＞

■開会挨拶

中條美奈子 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

今年度、厚生労働省委託事業「地域の人材による子育て支援活動強化研修事業」が全国 5 か所で行われる。9 月の福島開催に続き本日は 2 回目の石川開催で、近隣の県からも多様な方が参加されたいへん嬉しく思っている。平成 27 年度からスタートした子ども・子育て支援法に基づき、地域子育て支援も充実に向けた取り組みが進められている中、地域子育て拠点事業の役割も益々大切なものとなり、利用者支援事業の基本型を子育て家庭のより身近な場所である地域子育て拠点に配置を推進していく事が求められている。地域の親子に寄り添い、適切な支援を行っていく為にこのような研修会が設けられているので、本日はそれぞれの立場でネットワークを広げて学びあう機会としたい。

■プログラム 1 基調報告 厚生労働省子ども家庭局子育て支援課長 川鍋慎一さん 『地域子育て支援拠点事業の役割と展望、子ども子育て支援新制度について』

金沢市は平成 16 年に児童福祉法が改正になって中核市でも児童相談所が設置できるようになった時に、厚労省に措置権を含め持ちたいと来られた。途切れのない一貫性のあるものでアフターケアを含めた形でやりたいとの要望をうけ、よくこんな重い仕事に責任を持って行うとした判断に感銘を受けた事をまずお伝えしたい。

金沢市さんのこんな話がなかったらその後の流れも変わっていたかもしれない。また、同年に児童虐待防止法も改正になり国会議員の厚生労働委員会の方が児童相談所に視察に行かれた時に、視察先の児童相談所長より「虐待を少しでも防ごうとするのだったら児童相談所では敷居が高い、町の中に敷居が低く気軽に立ち寄れる場所を多くつくるべきだ」との話があった。

平成 14 年頃から役所主導でなく、当事者であるお母さん方の力で、いわば手作りで子育てひろばがつけられた。



そのルーツと障がい児のデイサービスのルーツは、建物概念のない機能（システム）を重視した点で非常に似ている。最近では子ども食堂も同様。

平成 19 年には地域子育て拠点事業として創設され、気軽に相談できる人がいる場、仲間づくりができる場、情報提供する人がいる場として全国につくられた。

敷居が低く、奥行きが深い拠点事業と両輪の利用者支援事業は、利用者と顔見知りの関係の中で各団体の専門性を発揮し関係機関との体制づくりやアウトリーチによる支援など当事者と共に選択し、オーダーメイドの子育て支援を展開している。

子育て世代包括支援センターについては、各自治体や地域子育て支援拠点でも行われ、日本版的ネウボラのようなものでワンストップで妊娠期から切れ目のない支援・一貫性を持つ制度としてはっきりさせた。地域子ども・子育て支援事業は画一的にやるのではなく地域の事情に合わせて進めて頂きたい。最後に新しい社会的養育ビジョンについては平成 28 年の児童福祉法改正により、子どもが権利の主体であること、里親や特別養子縁組などで養育されるよう、家庭養育優先の理念等が規定された。家族像の方向性が変わることも心にとめて子どもが不利益を被ることのないよう配慮をして頂きたい。

■プログラム 2 講義

ガイドラインを基に地域子育て支援拠点事業の基本 4 事業を深める」

【講師】 金山美和子さん 長野県短期大学幼児教育学科

「ガイドライン」は、子育て親子の視点に立ち、支援の質の標準化と質的向上を目指し、平成 22 年に発行された。子育て環境の変化に加え、子ども・子育て支援新制度など政策的な動向とそれに伴う実施要項の改正をふまえ、平成 29 年 3 月に改訂版が作成された。

「地域子育て支援拠点事業実施要綱」に示された 4 つの基本事業は、ア「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」、イ「子育て等に関する相談、援助の実施」、ウ「地域の子育て関連情報の提供」、エ「子育て及び子育て支援に関する講習等の実施」である。基本事業だけでなく、妊娠期から子育て期まで切れ目のない支援体制を構築するために、地域の連携や交流を図るなどの活動に取り組むことも期待されている。

ガイドラインに示された支援者の役割については、拠点事業の基本となるものであり改訂版においても変更点はない。支援者がどの親子に対しても温かく迎え入れているつもりであっても、中には支援者に受け入れてもらえるかどうかという不安を抱える利用者もいることに留意したい。

子どもの遊びと環境づくりについてガイドラインには、個々の子どもの興味や関心を大切にしながら発達に応じた環境設定の必要性が示された。安全を確保しながらも、子どもが自分の意思で遊びを選択し、ゆっくり遊び込める環境をつくるなど、拠点全体のゾーニング等へ配慮することが求められている。他の親子や地域の人たちと関わりあう機会をつくりだすことは、子どもの社会性を豊かに育むためにも大切である。

基本 4 事業を深めるためには、ガイドラインに基づく自己評価を活用していただきたい。また、利用者向けアンケートの実施により利用者の満足度や利用者が改善を求めている点などを見出すことも必要である。



■プログラム3 ミニレクチャー「子育て家庭を支える地域子育て支援拠点における利用者支援事業」

【講師】中條美奈子 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

利用者支援事業が、子育て家庭を支える地域子育て支援拠点で行なわれることが増えることを心より望んでいる。利用者支援事業は、地域子育て支援拠点事業が地域の多様な社会資源との関係性を深めてきた実績を踏まえ、創設された事業である。



地域子育て支援拠点事業の基本4事業（子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、子育て等に関する相談・援助の実施、地域の子育て関連情報の提供、子育て及び子育て支援に関する講習等の実施）をしっかりとやっていくことで、利用者支援事業へとつながっていく。利用者支援事業・基本型と地域子育て支援拠点事業は車の両輪である。

拠点を利用している家庭は何の心配や問題も無いのではなく、どの家庭にも隠れた問題があるかもしれないという視点をもった支援が必要である。

地域子育て支援サービスを利用していない理由は、支援サービスを使っていいということに気づいていないのかもしれない。多様化した支援策は利用者には身近ではなく、個々のニーズに応じた実際に使えるものとして手渡していけるようにすることが大切。

利用者支援は「入り口は広く、奥行きは深く」。地域子育て支援拠点での日々の会話の中から隠れたニーズを聞きとり気付く。そして利用者支援専門員は利用者本人の意思決定を尊重しながらし、オーダーメイドの子育て支援ができていく。利用者支援専門員は地域連携と社会資源の開発をする人。また、利用者支援専門員は外に出て行くことが必要なので、拠点スタッフに人員をプラスしないとできない。これまでの相談員との大きな違いは、利用者支援専門員は地域連携と社会資源の開発を行なう人でもあること。だれもが利用できる拠点のユニバーサル支援の中に特別なニーズを持つ対象者のためのターゲット支援が組み込まれる。そして地域のニーズをつかめばそれをまた拠点に戻してもいく。

■プログラム4 パネルディスカッション「つながりを紡ぎだす地域子育て支援拠点の力」

【コーディネーター】松田妙子 NPO 法人せたがや子育てネット 代表理事
NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

【パネリスト】川上由枝さん 認定 NPO 法人おやこの広場あさがお 理事
濱下峰子さん 氷見市地域子育てセンター 主査

【コメンテーター】金山美和子さん 長野県短期大学幼児教育学科 講師

◆松田妙子

今回のメインテーマである「つながりを紡ぎだす地域子育て支援拠点の力」の『つながりを紡ぎだす』とはどういったことなのか皆さんと話していきたい。「それは何でやっているのか?」「日常的にどのような取り組みをしているからできるのか?」という意識的にやっているところにフックをかけ、2人の事例より検討していきたい。

◆川上由枝さん

事例：「他県から田舎へ転入してきた家族の支援」を紹介。支援の経過としてまず「家族の強み」「地域の強み」を見立て、この家族の支援が必要なところを整理し、サポートを行った。それにより、家族と地域とのつながりが生まれ、様々な課題に変化も生じてきた。私達がなぜ、このような支援ができたかというところでは、第一に拠点ならではのアセスメントができること。



特別な専門機関ではなく日常の延長線上、対等平等な関係で自然な対応（寄り添い）での相談窓口の視点があり、発見の機能をもっている。また、利用者支援事業の受託によって、しっかりと「相談窓口」として示せるようになったことも大きく、訪問などアウトリーチによってつながるケースも増えてきている。

第二に拠点で定期的に「家族援助を学ぶ勉強会」をはじめたことで、多職種連携の場をもち、ソーシャルワークの視点での援助を学んでいること。問題点だけに注目せず、どこに強みがあるのかを見立て、支援していくことは今の相談体制の土台になっている。同時に分野を超えてつながりはじめ、ネットワークが広がっている。また、自団体でホームスタートや一時預かり、パパサークルなどの資源を手持ちしていることも強みと感じている。第三に日々のスタッフ間の相互理解。毎日の課題を共有することでスタッフの観点視点が育っている。個別支援から拠点へ、拠点から個別支援へつなげやすい。スタッフ個々の対応や立ち振る舞いは重要なので、常に基本に立ち返ることが大切で、その毎日の共有があつてこそ、様々なしかけ、配慮、つなぐことができることを16年積み上げてきて実感している。拠点がいくら旗をふっても来る人がいないと機能しないので最初の身近な入口として機能が果たせているか、毎日の「場」の持ち方の工夫は常に課題としている。

相談を受けるということは、画期的に解決して問題が無くなることもあるが、課題を抱えながら生きていくなかで、長い期間、寄り添う伴走の役目も拠点にはあると思う。それが良さだと思う。拠点を利用できても、できなくても拠点を核にネットワークを広げながら地域の力を借り、一緒に支えていきたい。地域の力無くては家族を支えられない。市では従来の相談窓口の担当と連絡会を持ち始めた。包括にむけた支援の“しくみ”をつくっているところ。その中にしっかりと拠点も混ざっていききたい。

◆松田妙子

この事例は拠点には来ていないが、このような支援ができることは拠点あつてこそで、拠点のなかで行われていることはその中だけでなく、むしろ、はみ出して地域にでる段階にきている。来ている人だけで交流してくれればいいというのではない。拠点という「面」があるから、点が線になり面につなげていくことができる。日々、拠点でいろんな親子と出会っているからこそ、根拠があつて気づくことが出来る発見の機能だと感じた。



◆金山美和子さん

一般的には、相談を受けた時に「なにをどうしたら良いだろう」と困っている点に注目しがちだが、この事例では、家庭と地域に分けて強みを見出し、そこから支援を考え実践している所が出色である。

◆濱下峰子さん

公立の拠点。富山県氷見市、子育てセンター等の概要説明。

地区住民が世話役としての「地区子育てサークル」は特徴的で14か所あり、子育て家庭と行政の重要な橋渡し、ネットワークとなっており、子育て仲間の集いの場を設定したり、関係機関からのアウトリーチを実施したり、イベント招致をしている。拠点は事務局だが、各地区社協や赤い羽根募金助成、各自治会からの補助などで運営している。世話役の交代があることで、モチベーションの維持が課題となっている。人材育成のために様々なしつけや学びの場の提供を行い、ボランティアでも楽しく活動していただけるように工夫している。



事例：「転入してきたHさん家族」を紹介。以前から保健師や母子保健推進員などが気にかけていたお母さんで、地域とのつながりが無いうえにメンタルの病気がある。転入後の情報がセンターへ入っていた。子育てセンターに七夕の笹の問い合わせの電話があったことをきっかけとし、日頃からの連携の中で地区の子育てサークルや本人のエンパワーメントにつながることが出来た。リスクのある親子の支援を考える時のポイントとして…

- ・アウェイ育児の応援はできているか
- ・氷見で暮らすための応援や情報提供はできているか
- ・ママの病気の受容は快くできたか、守秘は守られたか
- ・子育ての自信や人とのつながりのためにセンターが機能できたか
- ・かかわりのある人や団体と親子の情報の共有は適切か
- ・次のつながり（転出先へのつなぎ）を確認できたか
- ・ネットワークを整え、チャンスを逃さない恒常的な体制ができているか

を施設として確認した。

その家族はしばらく後にまた転勤になったが、娘のような思いで送り出した。今も転出先で頑張っている。

氷見のぶりは定置網法、そのように普段からチャンスを逃さないように支援の網をはっている。一本の電話での問い合わせに単にマニュアル的に答えるのではなく、違和感や勘、経験から、支援につながるように答えることができたのは恒常的なネットワークがあっこそ。

◆松田妙子

この事例は偶然に起こっていない。定置網のように情報を共有できるベース（連携）があったからこそ気づくことができたと思う。行政職は異動が課題だが、同じ職場に長くいるコツは？

◆濱下峰子さん

行政で、同じ職場に長くいるコツは、腰掛の仕事でなく長く担当できるように、継続で取り組むことの必要性とこの仕事をやりたい気持ちをぜひ訴え続けてほしい。ただのおばちゃんではなくスキルを持ち合わせたおしゃべりのできる専門職のおばちゃんであることが重要なので研修は欠かせない。行政の方は年度末の意向調査でぜひアピールしてほしい。

◆金山美和子さん

拠点自体がもつ資源の多さや、ネットワークの信頼関係があったからサポートできた事例である。2つの事例は共通点があり、拠点の基本4事業の丁寧な積み重ねがあって実現できたものとする。1回しか来ないかもしれない利用者への対応は拠点での難しさでもあり、配慮の必要なところでワンチャンスをつかむことができる力をつけることがつながりを紡ぎだす大切なところだと感じた。

まとめとして

- ▶相談体制としては、日頃から自分たちがいろんな資源をもっている、あるいは頼める相手をつくることを心がけておくことが大切。
- ▶ひろばならではのアセスメントとしては、背景にあるものまで見立て、いろんな方向からの支援を考える。気を付けたいことは相談者を否定するような厳しい見方をしないこと。
- ▶地域を巻き込んでいくということは、突然お願いするのではなく、勉強会や会議など日頃からの付き合いで関係性を創り出すことが大切。
- ▶ケースの終結の考え方としては、細く長く。プチッと切らない。利用者同士のつながりも創りながら助けてと言える関係づくりが大切。

H28 子ども子育て支援推進調査研究から

包括的な支援のイメージは、箱モノをつくるのではなくシステム作りである。親子の居場所という場がある中で（居場所型支援）、相談支援機能、訪問型支援、預かり型支援などの機能を持つ「多機能型の子育て支援拠点」について研究し、支援効果が確認されている。自治体からの事業委託などの機会があればぜひ効果的な支援展開の戦略として活用してほしい。

<<グループワーク>>

～つながりを紡ぎだす「何か」や「工夫」を出し合う～

◆松田妙子

地域につなげた時に理解してもらえるような仕掛けが拠点にある。日々無意識にしていることを「何でしているのか」、あるいは、何気なくやっていることが「ここに繋がっている」などアンテナを立てて話したい。

親子が近所のスーパーで声をかけられ、この地域で子育てしていくんだなと感じる、高齢者の福祉イベントに出ることで喜ばれる、中学生と赤ちゃんとの交流授業を過去に受けた方が「今度は自分の番だ」といって赤ちゃんを連れて参加してくれる、あるいは子ども同士の取り合いのシーンで、親同士がお互い様と承知している関係性があるなど・・・する側とされる側に分かれていないこれらの事は、拠点の中でどんな事がしかけられているのか、工夫があるのか。



=まとめ=

◆松田妙子

つながりを紡ぎだすとはどういうことか、自分たちの拠点で行っていることを日常的に取り出す作業がマッチングやひらめきにつながるのではないか。

◆川上由枝さん

事例は多様で、それぞれに大切なドラマがある。今回の事例も含め多くの課程を時間をかけみんなで考えサポートする体制が整ってきた。ますます自分達が担う役割に真摯に取り組む姿勢や責任を感じている。その上で欠かせないのは仲間。スタッフ、地域の中、地域を超えた仲間、リーダー間の繋がりも大切。そこでの力が利用者さんへむかう力になればいい。全国的なネットワークがあることで、転出転入の際もつなげてあげることができる。人の力、ネットワークの力をあらためて感じている。

◆濱下峰子さん

自分の仕事を考える機会となった。子育て支援拠点の仕事は、子育て中の人生の岐路に向き合う仕事だという謙虚さ、恐れが必要。スタッフとしての経験ごとに吸収するべき課題が変わる。目標をもって新しいことを学び、スキルアップに努めることが大切。氷見市では次年度、子育て世代包括支援センターが始まる。これまでの連携を強みとし、母子保健型と私どもの基本型の更なる連携で臨みたい。

◆金山美和子さん

つながりにより親子を支える拠点の役割が大きいことは、様々な事例から明らかになってきているが、少子高齢化が進行する地域では子育て人口が少なく、親子が他の親子や地域とつながる機会が減少していることに危機感を持たなくてはいけない。利用者数だけではない評価の仕方を考えていくことも課題であるとする。今後は、人口減少地域の子育て支援拠点での支援のあり方についての調査研究にも取り組んでいきたい。

◆川鍋慎一さん

地域子育て支援拠点事業がこういう形で地域(住民)と結びついてきていることはこれまでなかった話。これまでの児童福祉、健全育成の長い歴史からも大きな意味を持っていることだと思っている。

いろいろな事業をつくってきている中で気になっていることは、大人が目線で支援をやっているが、子どもはどう見ているか、どう感じているのか聞いていないことに気づいた。ぜひ、調査研究にも取り上げてほしい。

◆松田妙子

お勧めの本として「ヒアバイライト(子どもの声を聴く)の理念と手法」(子ども&まちネット編・萌文社)を紹介する。子どもの環境づくり、子どもからの視点というのが新しく今日の学びとしてキーワードとしたい。

<<終了挨拶>> 松田妙子 NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事